

介護福祉士の質の向上と卒後教育の在り方 —卒後講座の再考—

馬場由美子, 鍋島恵美子, 吉村浩美, 立川かおり, 福元健志

(西九州大学短期大学部 生活福祉学科)

(平成 27 年 11 月 30 日受理)

**The title: The improvement of the quality of care worker trainers and how
the postgraduate education should be
— The reconsideration of postgraduate courses —**

Yumiko BABA, Emiko NABESHIMA, Hiromi YOSHIMURA, Kaori TACHIKAWA, Takeshi FUKUMOTO

(Department of Living and Welfare, Nishikyushu University Junior College)

(Accepted November 30, 2015)

Abstract

Now that shortages of human resource and the quality of care worker trainers are big issues in nursing field, the postgraduate education that care worker training facilities hold is one of the important and learning opportunities for the care worker trainers to increase the awareness as specialists and to keep their motivation.

Therefore, we reviewed our postgraduate course so far and held the one that adopted the opinions from graduates. This is to explore the possibility of care worker training facilities being the more useful and lifelong learning ones that a lot of graduates utilize in order to be specialists as ever, not just tentative ones.

Key words : improvement of quality of care worker 介護福祉士の質の向上
postgraduate courses 卒後講座
opinions from graduates 卒業生の意向

介護福祉士の質の向上と卒後教育の在り方

—卒後講座の再考—

1. はじめに

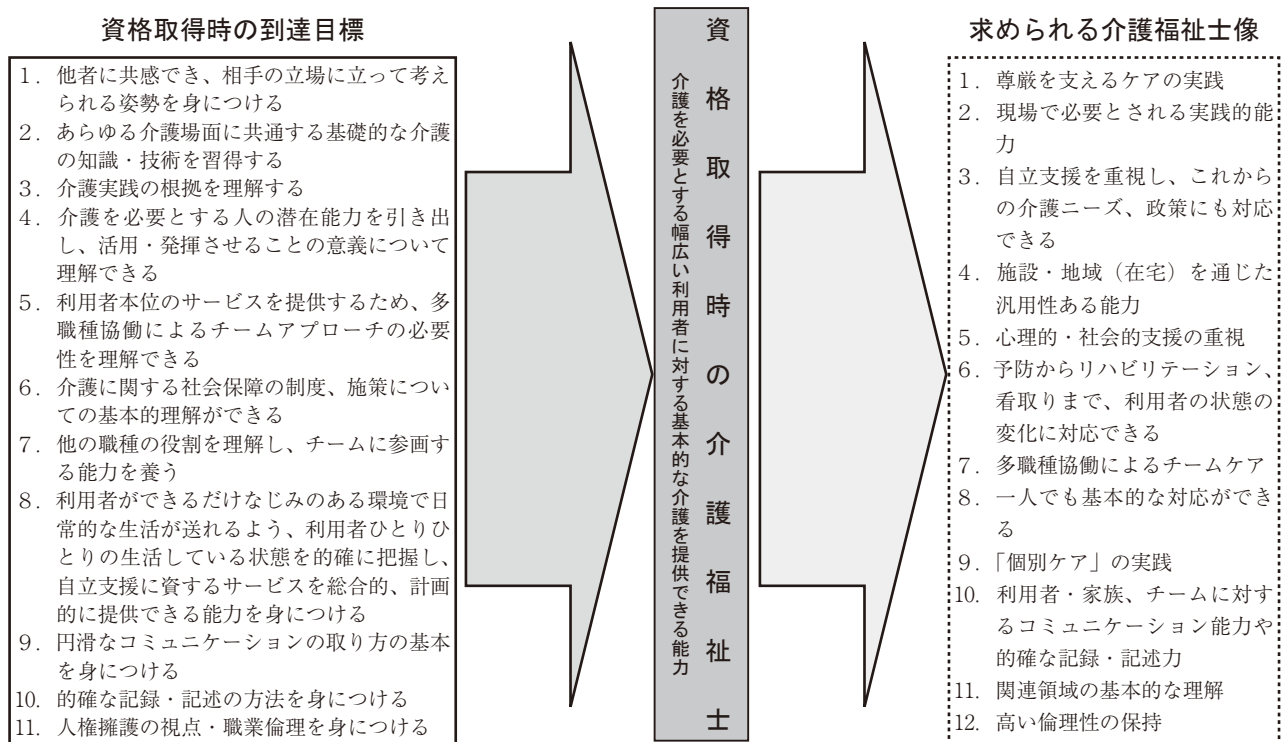
我が国の介護福祉士養成施設における介護福祉士養成は、1987（昭和62）年に制定された「社会福祉士及び介護福祉士法」に基づき、1988（昭和63）年に開始された。同年、西九州大学短期大学部（以下本学）生活福祉学科は、高齢化の進展などを背景にそれまでの家政科を改組して誕生し、国が初めて指定した介護福祉士養成施設の一つとして今日まで介護福祉士養成に努め、以後数多くの卒業生を輩出してきた。本学生活福祉学科卒業時には、殆どの学生が介護福祉士として福祉施設等へ就職し、それまでに習得した知識と技術を活かし各地域で活躍している。

国家資格である介護福祉士の誕生から25年が過ぎた現在、介護保険制度の導入や社会背景の変化に伴い、介護福祉士を取り巻く状況も大きく変化している。介護福祉士養成課程における教育カリキュラムも何度か見直され、平成21年改正のカリキュラムは、「人間と社会」（240時間）、「介護」（1260）時間、「こころとからだのしくみ」（300時間）の3領域1800時間に、さらに平成26年度より「医療的ケア」50時間を加えた1850時間に再編され、生活支援に関わる幅広い専門領域を相互に連携させながら学びを深めるカリキュラム構成となっている。

また、「介護福祉士の在り方及びその養成プロセスの見直しに関する検討会」の中で、11項目からなる「資格取得時の到達目標」に合わせ、12項からなる「求められる介護福祉士像」が示されたが（図1）、「資格取得時の到達目標」は、介護福祉士養成施設としての目標となり、本学科のディプロマポリシーは、その要素の多くを含ませたものとなっている。

図1 資格取得時の到達目標と求められる介護福祉士像

出典：厚生労働省「介護福祉士養成における教育内容等の見直しについて」



一方、「求められる介護福祉士像」（図1）は、介護福祉士養成における教育課程のみならず、介護福祉士の資格取得後の各々の自己研鑽の指標ともなるべき項目である。しかし、実際は、介護福祉士養成施設卒業後、多忙な介護業務を行う中で、この到達目標を意識して日々の介護に当たる卒業生はどれほどいるであろうか。また、労働環境の劣悪さや人間関係のトラブル等での離職の他、女性の場合、結婚、出産、育児、配偶者の転勤などによる離職も多く、介護福祉士の有資格者であっても資格を

活かしていない卒業生も多い。

現在、介護現場では、介護人材不足や介護福祉士の質が問われており、介護福祉士養成施設が実施する卒後教育は、介護福祉士としての意識を高め、「求められる介護福祉士像」を目指すためにも、モチベーションを持続させるための重要な学び・交流の機会と考える。そこで、本学生活福祉学科で長年実施してきた卒後講座を改めて見直し、卒業生の意向を取り入れた内容を模索し開催回数も増加させ、介護福祉士養成施設の役割が、介護福祉

士の養成教育という一過性のものではなく、専門職として質を高めるための生涯学習の場としての位置付けを強化することを目的とした。

平成25年度は卒後講座を9回実施したが、そのうちの第1回～3回は、5月の第1回に「卒業生情報交換会」として卒後講座に求める内容などを聴き、6月の第2回は資格取得希望の卒業生や在校生を対象に「リフレクソロジスト初級講座」を実施。7月の第3回には、その年の3月の卒業生を対象に「ホームカミングデイ」を実施した。それ以降は、佐賀県潜在的有資格者等再就職促進事業の補助金を活用してその第1回～6回として実施した(表1)。本稿では、平成25年度のこの事業結果を基に卒後講座の在り方について検討し報告する。

表1 佐賀県潜在的有資格者等再就業促進事業
平成25年度生活福祉学科卒後講座年間計画表

No.	月日	タイトル
1	平成25年9月14日(土)	ケアマネージャー受験対策講座 その①「介護保険制度・介護支援サービス」
2	9月21日(土)	ケアマネージャー受験対策講座 その②「保健医療の基礎知識」
3	9月24日(火)	「生活支援技術のスキルアップ」 生活支援技術の確認 ・持ち上げない介護 古美術介護の紹介等
4	10月19日(土)	「介護現場の現状と制度の変遷」 福祉サービス利用者援助事業 ・成年後見人制度 虐待防止法等
5	12月21日(土)	*講演会「介護職員の接遇マナー」
6	平成26年2月28日(金)	「介護福祉士の現状と課題」

2. 対象と方法

1) 対象

本学の生活福祉学科及び専攻科福祉専攻卒業生。ただし、一般社会人及び福祉施設職員、在学生、高校生も参加可能とした。

2) 方法

平成25年度初めに「卒業生情報交換会」で出た意見を基に卒後講座の内容を決定した。参加者の募集については、本学ホームページ及び同窓会会報、教員から卒業生への直接的案内にて受講を呼び掛けた。また、講演会形式のものについては、佐賀県内の福祉施設・事業所、高等学校等にも案内を配布し参加者を募った。

受講者の意見や要望などについては、講座内容、今後学びたいこと、介護福祉士資格を活かしているかなど8項目について受講直後にアンケート調査を実施した。アンケート記入に際しては、個人が特定できないよう配慮

し、設問への解答は拒否できること、アンケートの結果は、卒後講座の充実と介護福祉士資格の有効的活用の為の教育研究にのみ活用することを説明した。この結果を参考にしてさらに今後の卒後講座の在り方を検討したいと考えた。なお、第1、2回のケアマネージャー受験対策講座のアンケート調査は実施していない。

3. 結果と考察

1) 受講者

平成25年度佐賀県潜在的有資格者等再就職促進事業生活福祉学科卒後講座受講者の述べ人数は117名だった。そのうち、110名にアンケート調査を実施した。図2に受講者の性別、図3に受講者の年齢を示した。

図2 受講者の性別

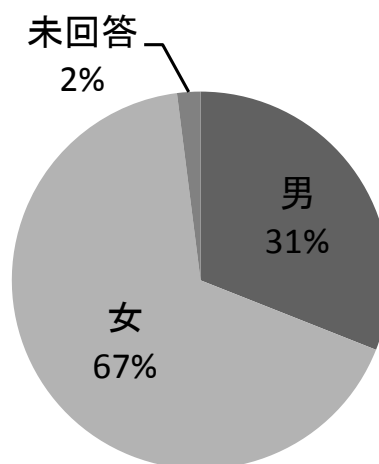
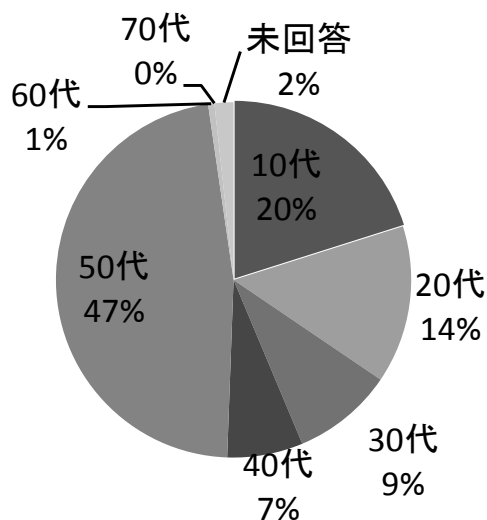


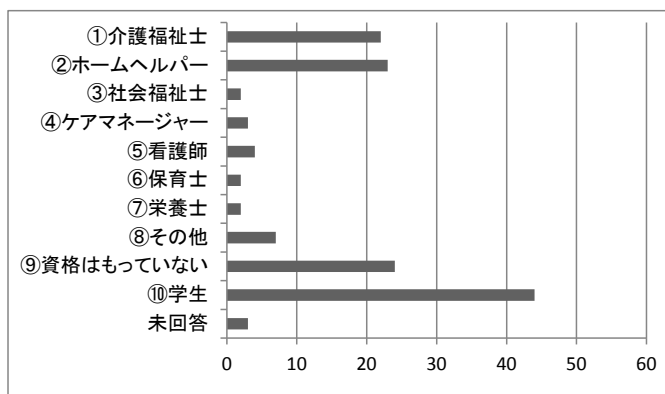
図3 受講者の年齢



男女の割合については、卒業生に女性が多いことから女性の受講者が多いことは容易に推測される。年齢をみると、50代が多く30代、40代の参加が著しく低いが、子育て世代であることが影響しているものと考えられる。なお、10代の20%は、本学の在校生の受講を表すものと考えられる。もちろん、在學生は、介護福祉士の資格を有しているわけではないが、卒後講座の内容は、時として在學生にとっても興味深い内容もあり、受講を希望する学生は少なくない。また、講演会形式のものは、在學生の介護に対するモチベーションを高めることから、教員も積極的な受講を呼び掛けている。

受講者が持っている資格（図4）では、介護福祉士とホームヘルパーがほぼ同等であった。介護事業所などにも参加を呼びかけたことから、少数ではあるが、栄養士、保育士、看護師などの介護に関連する有資格者の受講があった。このことから、介護現場での多職種協働の現状がうかがえた。

図4 持っている資格 (%)



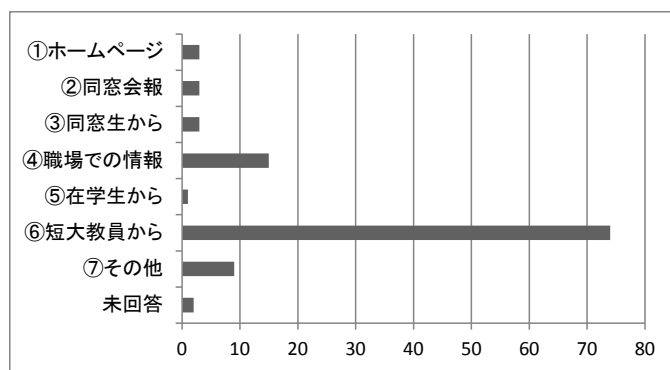
2) 受講の動機

生活福祉学科では、開校当初から学科恒例行事として卒後講座を年に1回～2回開催してきた。これまでも、参加者が少ないことから、卒後講座の在り方については検討を重ねてはきたものの、受講者の増加は非常に難しい課題であった。今回も、前述したように、これまで同様ホームページや同窓会会報掲載での案内を行ったり、教員から卒業生への対面での呼び掛けや電話、Eメールでの連絡、無料携帯アプリ LINE を用いて案内を行った。

図5のとおり、短大教員からの案内により卒後講座を知ったと答えた者が多い。卒業生が母校のホームページをどの程度閲覧しているのか、あるいは、各学科の情報をどの程度把握しているのかについては別に調査することが必要ともいえるが、そこからの情報が受講につながるケースは、ごく僅かではなかろうかと考える。また、同窓会会報による案内においても同様のことがいえるが、同窓会事務局への卒後講座に関する問い合わせは時

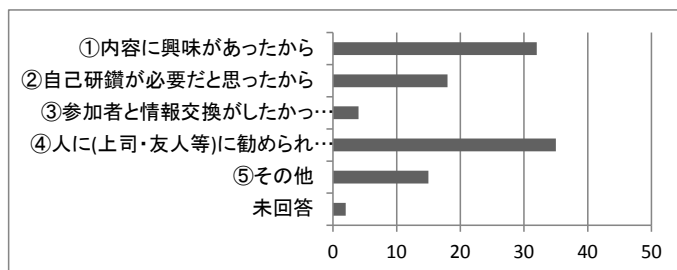
折あり、その内容は、「自分は卒業生だが日程が合わず参加できない。」が多い。また、「卒業生ではないが、自分の勤務先の職員が受講希望しており、受講は可能か？」という、卒業生以外の受講の問い合わせもある。このことは、図5の④「職場での情報」に当たると考えられる。これらのことから、受講案内は、ホームページや紙媒体の案内だけでなく、「人」を介した案内の方が、受講のきっかけ・動機を生みだしやすいことがうかがえる。

図5 講座の案内をどうして知ったか (%)



参加の動機については、図6で示すとおり、④「人に勧められた」が一番多く、次いで①「内容に興味があったから」、②「自己研鑽が必要だと思ったから」と続いている。このことこそ、卒後教育の意義であり、教員が卒業生に求めている介護福祉士としての姿ではなかろうか。また、受講者の年齢で一番多かったのは50代であるが、この年代は、管理者も少なくないと想像でき、受講者自身の成長（自己研鑽）と合わせて、職場での人材育成についても卒後講座での学びを活かす狙いもあるのではないかと推測するところである。

図6 参加の動機 (%)



3) 講座の内容

講座の内容（図7）については、参考になったという回答が殆どであり、講座の雰囲気（図8）についても良かったという回答が多かった。

具体的な意見については、以下の通りである。

図7 講座の内容 (%)

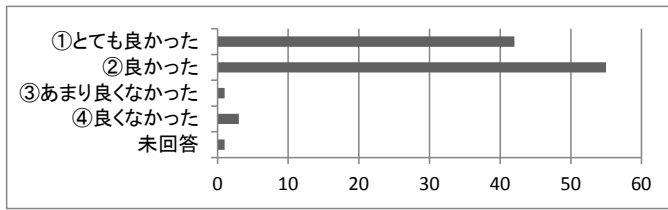
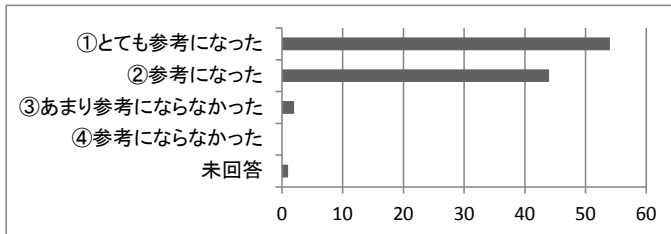


図8 講座の雰囲気 (%)



(1) 講座の内容が参考になった理由

<第3回：生活支援技術のスキルアップ>

- ・知らないことを知れた。
- ・女性はどうしても弱かったり、体格差などで介助が困難な時があるのでビニール袋一つで介助が楽になるのはとても参考になった。
- ・介護技術の他のやり方が参考になった。

<第4回：介護現場の現状と制度の変遷>

- ・制度の仕組みがよりわかった。
- ・制度についての説明が分かりやすかった。
- ・自分の知らない分野を深く知ることができた。
- ・先生に現場の話聞いた。
- ・身近な問題として気になっていた。
- ・成年後見制度、介護施設の実態を学べとても参考になった。
- ・後見人制度が明確になった。

<第5回：介護職員の接遇マナー>

- ・今日学んだことを自分の身につけることができれば、職場だけでなく自分の周りの方々にも幸せ感を与えられる人になれると思うし、そうなりたと思った。
- ・自分を相手にどう思ってもらえるか、第一印象に気をつけなくてはいけないと思った。
- ・話が詳しかった。
- ・自分自身の利用者様への声かけが荒いことがあり、自分を見つめなおす意味でもよい機会となった。
- ・訪問介護のサービス責任者をしている。利用者からスタッフへのクレーム対応についてどうすべきか考えていた。クレームにならないようなおもてなしの心で頑張っていきたいと思った。

- ・わかっていてもなかなか実行できないこともあり、とても参考になった。
- ・笑顔の作り方、接遇の意味がよくわかった。
- ・言葉かけに気をつけようと思った。
- ・利用者様に対しての言葉かけ、思いやりがなかったと思う。とても大切だなと思った。
- ・説明がわかりやすく、とても頭に残った。
- ・再確認できた。
- ・接遇マナーを知ることができた。
- ・接遇についてはいつもスタッフに話しているが、具体的で分かりやすく、私自身もスタッフに話す時の参考になった。
- ・初めて介護の仕事に就く予定なのでとても参考になり、今後実行しようと思った。
- ・対応の仕方の再確認ができた。
- ・学生（実習生）へのアドバイス時に役立てられる。もちろん自分自身の振り返りも。
- ・いかに普通の生活(態度)が必要か、参考になった。
- ・人との接し方をここまで深く考えて教えてもらったことはなかったため、自分の接し方を見直そうと思った。
- ・具体的な話でとてもよかった。
- ・マナーや身だしなみ、接し方などを知ることができた。
- ・マナーなど礼儀が大切だとわかった。
- ・マナーやホスピタリティについて聞いた。
- ・ホスピタリティーやマナーについてよくわかった。
- ・自分に今必要なことを得ることができた。
- ・自分は将来介護職に就きたいので、すごく勉強になった。
- ・自分が介護するときの対応の役に立つと思った。
- ・私は高校の学生だが、これから勉強していくうえで役に立つと思った。
- ・相手に接するときの姿勢がよくわかった。
- ・今後人とかかわる際の良い参考になった。
- ・学校よりも詳しい基本的な接遇マナーに関する知識を学んだ。
- ・接遇とは何か詳しく知ることができた。
- ・笑顔と心が大切。
- ・笑顔でホスピタリティ精神を持って介護を行うことが重要だと思った。
- ・気配り心配りについて学ぶことができた。
- ・これからの実習に行かせる内容がたくさんあった。
- ・接遇ということに対して、改めて考えさせられた。人と接していく中で接遇とはとても重要なことであり、また、将来対人援助を行う仕事に就く者として、もっと考えていかなければならないと思った。
- ・ホスピタリティーの内容を詳しく聞いてよかった。

- ・コミュニケーションのコツを教えてもらった。
- ・ホスピタリティー精神が大切だとわかった（心でつながっていく）。
- ・あいさつの意味がわかった。
- ・基本的なことをおさえることができた。
- ・身だしなみの大切さがわかった。
- ・今後仕事するにあたって必要だと思った。
- ・マスクを着用した際の人との関わり方の話など納得するところが多くあった。
- ・今後の実習でためになる話だった。
- ・相手の気持ちを考えて行動することが大切。
- ・普段行っていることが、いかに大事なのか（挨拶、態度、身だしなみ）を改めて感じた。こういったことを今後の仕事に生かしていけたらと思う。
- ・社会人経験者なので、分かっていることばかりではあったが、改めて再認識できてよかったと思った。
- ・具体的に細かい手の組み方や立ち位置等を教えていただいたので分かり易かった。
- ・おもてなしを改めて理解できた。
- ・どのような言葉遣いがいけないのかがよくわかった。
- ・丁寧と言っているつもりでも、言い切りの形では命令になってしまうので、依頼形でいった方がいいということを学んだ。
- ・介護もサービスの仕事であり、改めてサービスの仕方、大事さを学んだ。
- ・社会人として、人間としてとても大切なことを学べた。
- ・対応の盲点なども言われ勉強になった。
- ・社会に出たら大事なことを学べてよかった。
- ・利用者とはどう接すればいいか参考になった。
- ・各施設によって対応がまちまちで分からなかったので学べてよかった。
- ・第一印象のポイント、具体的な方法が理解できた。
- ・来年就職なので、そのための心構えとしてとてもよかった。
- ・今まで知らなかったことを知ることができた。
- ・学校で学ぶことの少ないマナーについて詳しく聞くことができた。
- ・介護をする際は勿論、生活していくうえでの全体的なことに当てはまり、実行すべきだと感じた。バイトの接遇も頑張ろうと思った。
- ・人の印象で、どういうところが見られているかがわかった。
- ・利用者さんやご家族への対応について学ぶことができた。
- ・接遇の際のマナーや心意気を学べた。
- ・接遇をどのようにすればよいかわかった。
- ・自分を守るのではなく相手も守ることを考えない

と・・・という言葉がよかった。

<第6回：介護福祉士の現状と課題>

- ・わかりやすく説明されていた。
- ・現場での状況、問題点等今後の勉強就職に役立つことが多い講座だったと思う。
- ・現場の実情がわかった。
- ・認知症のことをより深く参考になった。
- ・実父が認知症のため、改めて勉強になった。
- ・制度の変更とかの情報、家族対応、リスクとかを学ぶことができた。
- ・基本的な内容の再確認ができたように思う。

受講者は、講座に参加することで介護福祉士としての自身の役割を再認識し、講座での学びを介護現場でどう活かすかを考えるきっかけとしていることが分かる。また、在学生や高校生など、介護福祉士を目指す人たちの意識の向上もうかがえる。

(2) 講座の雰囲気が良かった理由

<第3回：生活支援技術のスキルアップ>

- ・なごんでいた。
- ・皆でいろいろ考えながら楽しい雰囲気の中でできたのでよかった。
- ・教員の方々が楽しくしてくれた。

<第4回：介護現場の現状と制度の変遷>

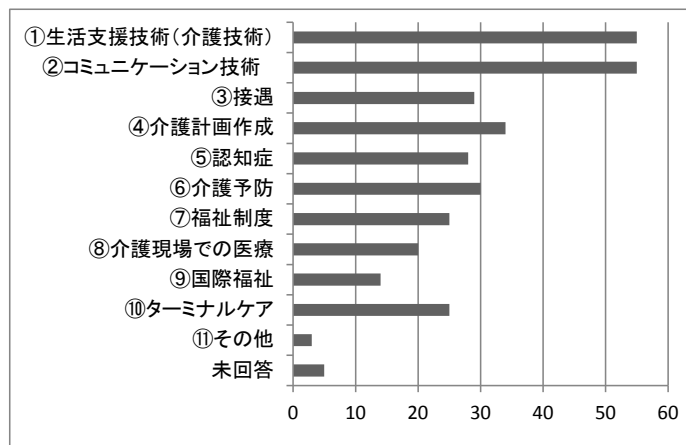
- ・先生と直接話げできた。
- ・卒業生ということで気軽に話げできた。
- ・短大の先生たちも参加されていて和やかでよかった。
- ・わかりやすいパワーポイントと説明だった。

<第5回：介護職員の接遇マナー>

- ・講師の先生の話し方、声がとても聞きやすく、また、素敵なかたで楽しかった。
- ・全体的に静かに聞くことができた。
- ・静かだったので、話に集中できた。
- ・とても雰囲気が良かった。
- ・皆さん静かで、先生の話もわかりやすくよかった。
- ・皆さん真剣で私語もなく良かった。
- ・話に引き込まれるととてもいい講座だった。
- ・真剣に聞ける静けさだった。
- ・具体的な説明が大変わかりやすかった。
- ・解説が易しくわかりやすかった。
- ・真剣にメモを取って聞く人が多かった。
- ・わかりやすい説明と、聞き取りやすい音量が良かった。

- ・身近にあることや実話を交えて話されていたことが、わかりやすくイメージしやすかった。
- ・普段の授業と違っておしゃべりがなく良かった。
- ・気軽に聞くことができた。
- ・受講者に聞く姿勢があった。
- ・受講者の聞く態度が素晴らしかった。
- ・真剣な雰囲気の中で聞くことができた。
- ・伝えたいことと思っていたことが一致して聴講しやすかった。
- ・講師の方の話し方がとても優しく、耳に残る話し方だった。

図9 今後学びたいこと (%)



<第6回：介護福祉士の現状と課題>

- ・こじんまりとしていた。
- ・お互い意見交換できた。
- ・いつもは交流できないOBの方と交流できた。
- ・質問に対しての返答が良かった。
- ・堅苦しくなくてよかった。

講座の雰囲気については、主に講師の話し方、他の受講者の受講態度により、善し悪しを判断していることが分かる。確かに、講師の話し方によって会場の雰囲気は一変することは珍しくない。それにより、他の受講者の受講態度も変化する。静かなだけだと居眠りをする者がいたり、机の下でスマートフォンを操作する者がいたりすることもあるが、今回の卒後講座では、どの回もその様子は見られなかった。

また、講演会形式を除いては、受講者は少数であったが、講師の先生や担当教員と卒生や卒業生同士、卒業生と在学生などの交流が自然な形で行われ、そのことが雰囲気の良さを感じることにつながることも明らかになったと言えよう。

(3) 卒後講座についての意見・要望

受講者は、介護福祉士の学びとして何を求めているのかを知るため、今後学びたいと思っている項目として①生活支援技術(介護技術)、②コミュニケーション技術、③接遇、④介護計画作成、⑤認知症、⑥介護予防、⑦福祉制度、⑧介護現場での医療、⑨国際福祉、⑩ターミナルケア、⑪その他の11項目を選択肢とした。アンケート結果は、①生活支援技術(介護技術)、②コミュニケーション技術が同数、次いで④介護計画作成、⑥介護予防、③接遇と続く(図9)。

また、最後の質問項目で、卒後講座についての意見・要望の自由記述欄には、以下の記載があった。

- ・今回のような介護技術(現場で使えるもの)をいろいろな場面を想定して行くと実際の現場で活かせると思う。
- ・介護現場でのスタッフ間・利用者様との人間関係で

悩む人も多い。人との関わり方の講座を入れてもらえるとうい。

- ・今後も参加したい。是非、案内がほしい。
- ・新しい情報を期待していたので少し残念。介護保険の変更点などを期待していた。内容が教科書寄りだった。
- ・自分が成長するきっかけをもらったようで嬉しくわくわくしている。
- ・講座があるときは、是非声を掛けてほしい。必ず参加して利用者に満足していただくサービスを提供したい。
- ・とても勉強になった。また参加したい。
- ・いろいろな題材のセミナーを行って欲しい。
- ・敬語と方言の使い方について聞きたい。
- ・職場での人間関係を円滑にする講座。
- ・認知症の人とのコミュニケーションについて知りたい。
- ・是非数多く開催してほしい。
- ・コミュニケーションの実践があればよいと思う。
- ・新しいケアの方法を知りたい。
- ・制度が変更になるときの情報を教えて欲しい。
- ・このような機会をもっと増やしてほしい。

多くの受講者は、介護の基本といえる生活支援技術やコミュニケーション技術を学びたいと考えている。どちらの技術も、ある程度は在学中に習得したはずである。しかし、学校ではお互いがモデルになり演習するが、介護現場では、さまざまな心身の状態の要介護者に接する。生活支援技術においてもコミュニケーション技術においても、基本を理解したうえでの応用力が求められる。卒後講座を受講する卒業生は、おそらくそれなりの向上心を持って日々の介護業務に当たっているものと想像する。しかし、各々の職場では解決できないことも多々あり、母校では、初心に戻って教員の協力を得ながら解決できるのではないかと卒業生の思いを感じるのである。

4. 課題

卒後講座の課題に、まず、受講者が少ないことがあげられる。平成25年度の卒後講座の受講者の延べ人数は117人であるが、前述したとおり全てが卒業生というわけではなく、在学生等も多く含んでいる。

第1回、第2回の「ケアマネジャー受験対策講座」は、毎年開催しており、本学科の卒後講座の恒例となっている。ケアマネジャーの試験に近い時期の開催であることから、介護保険制度や保健医療の基礎知識などの概要や模擬試験とその解説を行うことが中心である。ケアマネジャー受験対策講座については、問い合わせはあるものの、案内が十分周知されていないことや他の団体も実施していることから、参加者は例年少ない。ただ、受講者からは、「受講してよかった」という声が聞かれるため、案内方法・案内時期や開催時期の検討を行うことで、参加者の増加が見込まれると考える。

第3回の「生活支援技術のスキルアップ」は、現在介護現場で働いていない有資格者が戸惑わないような内容とした。まず、介護現場で実践されている生活支援技術（介護技術）の確認をしたうえで、本学で指導している生活支援技術を紹介。その後、今後介護現場で多く導入されると思われる持ち上げない移動・移乗技術の紹介と実践を行った。参加者は4名と非常に少なかったが、アンケート結果からは、受講者の意欲がうかがえた。ただし、今回の参加者は現在資格（看護師含）を活かして就業している方のみであった。介護現場で働いていない有資格者の再就職を意識するのであれば、「スキルアップ」ではなく、「生活支援技術の基本の確認」とするなど、内容やタイトルについて十分に検討するべきであったと反省する。ただ、講座の中では、参加者と講師が要介護者役と介護者役になって一緒に実技を検証し、その中で疑問点や改善方法等も表出し非常に有意義な時間であった。

第4回の「介護現場の現状と制度の変遷」は、講師を佐賀県社会福祉士会に依頼して実施した。卒業生からの声に、「介護現場での生活支援技術も勉強が必要だが、制度について学びなおしたい」という意見は少なくない。それらの意見からこの講座を実施した。講座の内容は、非常にわかりやすく参加者も熱心な受講態度だった。また、講義の後は、講師との意見交換の場を設け、制度について日頃の疑問などを質問したり、参加者同士の現状を話し合ったり、良い情報交換の場となっていた。参加人数は、8名と少数であったが、少人数だからこそその講師と受講生との距離感もあり、内容によっては、少人数での開催のほうが深い学びになるのではないだろうか。

第5回「介護職員の接遇マナー」は、講演会形式で実施し、平成16年度から平成24年度生活福祉学科及び専攻

科（保育）福祉専攻卒業生380名、佐賀県内の高等学校45校、介護実習施設112か所、その他佐賀県内の福祉施設・事業所156か所に案内を郵送した。また、本学の前在学生にも呼びかけ参加を促したこともあり、他の講座に比べると非常に多い参加人数であった。講演会のテーマが、介護現場で常に課題となる「接遇」であったことも参加の動機に大きくつながったものと考えられる。また、講師の要望で、講演会の内容についての打ち合わせも数回行ったが、講師の「受講する参加者の思いに応えたい。介護現場を少しでも改善する手助けがしたい。」という強い意思があったことも参加者の評価が高かった要因につながるのではないだろうか。講師の「伝える力」「人を引き付ける力」の重要性を再認識させられた。

第6回「介護福祉士の現状と課題」の参加者は9名。講師は、本学を平成18年度に卒業した後作業療法士の資格を取得し、現在は作業療法士として活躍しながらも、介護とリハビリの両面から介護現場を考えている卒業生に依頼。特に、認知症の事例を中心にした介護福祉士の現状、課題、可能性についての講義であった。参加者は、現在介護福祉士として就業している卒業生、有資格者でありながら家庭の事情で就業されていない方、本学学生であったが、皆熱心な受講態度であった。講座の最後には、質疑応答の時間を設けたが、介護福祉士としての悩みや作業療法士である講師への助言を求める声もあった。第4回と同様、少人数だからこそその講師と受講者の距離感で、受講生は講師への質問がしやすく、講師も受講者の表情を見て理解度を確認しながら講義を進めていた。

これらの講座の状況から、卒後講座の内容によっては、少人数を定員とした企画・実施を検討することで、これまでとは違う内容を検討することが可能となる。例えば、医療的ケアなどは、最も適した内容ではなからうかと考える。

5. まとめ

平成25年度の卒後講座は、卒業生の要望を取り入れた内容で計画した。しかし、参加者数は非常に少ない結果であった。勤務体系（シフト）等の関係もあり、ホームページやE-mail、文書等で参加を呼びかけても「都合が合えば行きます」などの返答が多かった。開催日を土曜日に偏らないよう設定したが、あまり効果はなかったようである。参加者を増やすことは今後の大きな課題である。

講座内容については、アンケート結果から参加者の反応はおおむね良好で、今後も講座の案内が欲しいとの声もあった。また、参加者同士の情報交換ができたことや参加者自身の自己研鑽の場になったことがうかがえ、こ

の卒後講座が非常に意義あるものだったといえるのではないだろうか。

平成25年度・26年度は、卒後講座を佐賀県が実施している潜在的有資格者等再就職促進事業として資格を活用していない卒業生の再就業につなげるという目的も視野に入れながら実施したのだが、それぞれに個人的な事情があり、再就職につなげることは非常に困難であった。現在、介護人材確保のために様々な補助事業が展開されており、これらの補助事業を活用することで回数も多く実施することができる。今後も介護福祉士のスキルアップや休止している有資格者の活用を考慮した卒後講座を開催していきたいと考えており、そのためには再度内容を検討する必要があると考える。

参考文献

- 1、(公益法人)日本介護福祉士会(編):介護実習指導者テキスト(2013.7.18),(社会福祉法人全国社会福祉協議会)
- 2、西村洋子(編):介護の基本 最新介護福祉全書,第3巻(2014.12.5),(メヂカルフレンド社)
- 3、学校法人永原学園:創立五十周年記念(1996.11.1),(第一法規出版株式会社)
- 4、鍋島恵美子、重松義成、光野裕美子、鳥かおり、吉村浩美、馬場由美子:卒後教育の効果に関する研究—卒後教育を通し、介護福祉士の質の向上・学生への効果・教育のあり方を検証する—介護福祉教育第13巻第1号(2007.7.20),日本介護福祉教育学会
- 5、厚生労働省:社会福祉士及び介護福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて(案):www.mhlw.go.jp/bunya/seikatsuhogo/dl/shakai-kaigo-yousei02.pdf(2008)